

不登校対策：「月 3 日」の欠席に早期対応を！

平成 19 年度の問題行動等調査の結果から、欠席が年間 30 日を超える人数を欠席日数別に集計した結果、小学校の約 50%、中学校の約 35%が「年間 30 日～69 日」の欠席者であることがわかりました。この「30 日～69 日」の欠席者の月別平均欠席数を見ると、2 学期前半までは、「月 3 日前後の欠席」で推移しています。不登校対策の一つとして、「月 3 日」の児童生徒への早期対応があげられます。



「言葉に頼り過ぎないで」

スクールカウンセラーから

気持を言葉にする力には個人差がありますが、高校生ぐらいにならないと、自分の感情の動きを十分に言葉で表現するのは難しいようです。そのため小中学生はストレスがたまってきても、あまり「悩み」にはなりません。落ち着きがなくなったり、表情がかたくなったり、ぼーっとしていたり、宿題をしてこなかったりと、行動が変わってくる場合があります。また顔色が冴えなかったり、頭痛や腹痛を訴えて保健室に行ったり、学校を休んだりします。

こうした「行動のサイン」と「身体のサイン」に注目するのが、子どもたちの元気をチェックするコツかもしれません。「このごろ休みが多いけど、大丈夫？」と子どもに聞いて、「この前は調子が悪かったけど、もう大丈夫です」と言われれば、私たちはまず安心します。でもこうした「言葉のサイン」に頼り過ぎてしまうと、不登校の始まりを見逃してしまうことにもなりかねません。彼らが自分でも元気がどうかわからなかったり、その場をやり過ごすための返事をするところがあるからです。やはり本音は言葉よりも行動に表れるし、身体はうそをつかないものです。
(青山正紀)

「3日間で、まず行動！（初期対応）」

総合教育センター教育相談担当から

不登校は、何らかの困難や不適応状況に対し、自力では対処できず、周囲の適切なサポートが得られないときに起こります。

困難や不適応状況が起こり始めたときに、自力で立ち向かう力が少しでも強く、周囲のサポートもしやすいうちに、教師は1日でも早く対応したいものです。

例えば、「風邪欠」と連絡を受けていても、3日目には再確認の家庭訪問をすること、ただの風邪であったとしても、とにかく集まり、教師間で情報交換をしてみることで、学校生活をその児童生徒や保護者がどう受け止めているのか確認してみることで、誰が、どこまで（どこから）なら動けるかを見つけることなどです。「まずは様子を見よう」「登校刺激は控えよう」と言って行動しないことではありません。

上記データで、4～7月（1学期間）の3日間の欠席に対処し、2学期に持ち越さないことができれば、30日には届きません。まずは3日間で動く習慣をつけましょう。

(主任研修主事 佐藤一也)

不適応対策に係る情報を発信していきます。不適応対策指導の参考に活用していただければ幸いです。
岩手県教育委員会事務局学校教育室生徒指導担当 (019-629-6145)

<http://www.pref.iwate.jp/list.rbz?nd=1813&ik=3&pnp=86&pnp=1779&pnp=1813>